不思議現象に対する態度と空想傾向との関連

不思議現象に対する態度 (44)

○川上正浩¹・小城英子²・坂田浩之¹

(¹大阪樟蔭女子大学心理学部・²聖心女子大学文学部)

キーワード: 不思議現象, 態度, 空想傾向

Relations between Attitudes towards Paranormal Phenomena and fantasy proneness: Attitudes towards paranormal phenomena (44)

Masahiro KAWAKAMI¹, Eiko KOSHIRO² and Hiroyuki SAKATA¹

(¹ Faculty of Psychology, Osaka Shoin Women's Univ., ² Faculty of Liberal Arts, Univ. of the Sacred Heart)

Key Words: paranormal phenomena, attitudes, fantasy proneness

目 的

心霊現象や占い, 宇宙人・UFO, 超能力など, 現在の科学ではその存在や効果が立証されないが人々に信じられていることのある現象を総括して“不思議現象”と呼ぶ(小城・坂田・川上, 2008)。坂田・川上・小城(2012)は, 不思議現象に対する態度尺度 Apple (Attitude toward Paranormal Phenomena Scale 小城・坂田・川上, 2008)の短縮版, Apple SE/30を提唱した。Apple (SE/30)は, 不思議現象に対する態度を, 占い・呪術嗜好性, スピリチュアリティ信奉, 娯楽的享受, 懐疑, 恐怖, 霊体験の6つの下位尺度によって測定するものである。本研究では, 岡田・松岡・轟(2004)による空想傾向(fantasy proneness)と不思議現象に対する態度との関連について, 関連研究により吟味する。

方 法

調査対象者 近畿圏のO女子大学に所属する大学生61名が調査に参加した。その平均年齢は18.7歳($SD=1.0$)であった。

調査内容 (1)不思議現象に対する態度尺度30項目(坂田他, 2012): “占い・呪術嗜好性”“スピリチュアリティ信奉”“娯楽的享受”“懐疑”“恐怖”“霊体験”の6つの下位尺度から不思議現象に対する態度を測定する尺度であるApple SE/30を用いた。Apple SE/30は5件法にて実施した。(2)空想傾向尺度25項目(岡田他, 2004): Merckelbach, Horselenberg, & Muris (2001)が作成したCreative Experience Questionnaire (CEQ)の日本語訳(CEQ-J)を用いた。岡田他(2004)の研究では主成分分析の結果, “異常な体験”, “空想の鮮明性”, “子どものころの体験”の3つの主成分が抽出されているが, CEQ-Jは全体として“高い内的整合性を持つ”とされているため, 総合得点で単一の尺度であると見なし使用する。CEQ-Jは7件法にて実施した。なお, 調査に用いた質問票には, 他の尺度項目も含まれていたが, 本報告では省略する。

手続き 調査は心理学系講義の時間内に集団で実施された。

結 果

Apple SE/30については坂田他(2012)の分析に倣い, 空想傾向については岡田他(2004)に倣い, 個人ごとにApple SE/30の下位尺度得点(占い・呪術嗜好性, スピリチュアリティ信奉, 娯楽的享受, 懐疑, 恐怖, 霊体験)および空想傾向尺度

の総合得点の算出を行った。Apple SE/30を構成する6つの下位尺度得点と, 空想傾向尺度との関連を検討するため, 相関係数を算出した結果をTable 1に示した。Apple SE/30を構成する6つの下位尺度のうち, スピリチュアリティ信奉, 娯楽的享受, 霊体験の3つの下位尺度が空想傾向と正の相関を示していた(Table 1参照)。

考 察

本研究では不思議現象に対する態度と空想傾向との関連を吟味した。空想傾向の強い人はイメージや想像, ファンタジーの世界で生活する傾向が強く, 事実とフィクションもしくは空想を混同する傾向があるとされており, また幻覚的な強度を持った記憶やイメージの生成なども経験することが多いとされている。

したがって霊体験との空想傾向との間に正の相関が認められたことは, 個人にとって霊体験と捉えられる現象が, 当該個人内で生成されたイメージや記憶の結果であることを示唆している可能性もある。

一方で, 娯楽的享受と空想傾向との間に相関が認められたことから, 空想傾向の高さは, こうした空想をエンターテインメントとして楽しむ心性と関連している可能性が示唆される。すなわち空想傾向の高さは, ファンタジーの世界, 論理では説明されない世界に対して, これをポジティブに楽しむ傾向であると考えられることもできる。これは, 不思議現象に関する会話やコミュニケーションをエンターテインメントとして楽しむ娯楽的享受と一貫した傾向であると解釈することが可能である。

また, スピリチュアリティ信奉と空想傾向との間の相関は, 霊魂や生まれ変わりといったスピリチュアルな概念に対する信奉が, 想像やファンタジーの世界と整合性が高いことを反映していると考えられる。しかしながらこうした結果のみからでは, 眞嶋(2012)も指摘しているように, 不思議現象に対する信奉を持っていたからファンタジーへの傾倒が生じたのか, ファンタジーへの傾倒傾向を持っていたから, 不思議現象に対する信奉を持つに至ったのかが明確ではない。今後, 発達のデータや複数時点でのデータ収集などより立体的な方法でメカニズムを明らかにしていく必要があると考えられる。また, 調査対象者数を増やし, 不思議現象に対する態度についての層別分析を行うことも必要であると考えられる。

Table 1 Apple SE/30と空想傾向尺度との相関

	占い・呪術 嗜好性	スピリチュアリティ 信奉	娯楽的享受	懐疑	恐怖	霊体験
空想傾向	.164	.359 **	.465 **	.154	.196	.379 **

** $p < .01$